

## 後深草院二条(続8) [二条の失踪編]

～日記文学『とはずがたり』の作者～

岡崎 嘉彦

(前回のあらすじ)

二条と隆親との間で揉め事が起こり始める。それは、隆親の最愛の孫娘が二条よりも高い位の役にも拘わらず、二条の方が上座であったためである。それを見た隆親が座り直すように要求し始める。それを聞いた二条はこんなことに参加しても仕方が無いと思ひ席を立ち、院宛ての手紙を書くとい成院の近くの庵へと訪ねていく。

手紙のなかには、

数ならぬ 憂き身を知れば 四つの緒も

この世のほかにも おもひ切りつつ

と歌が書き残してあった。

そのうちに酒宴が半ば過ぎて、両院が約束のままにお出ましになったところ、明石の上の代わりの琵琶の役すなわち二条がいない。後深草院がことの次第をお尋ねになると、東の御方がありのままに申された。それを両院がお聞きになり、「もっともなことだ。二条が席を立ったことはそれだけの理由がある。」とされ、重ねて局へ二条のことを尋ねられると、女房が「もはや二条殿は都へと出られました。もしお召しがあれば、ここにあるこの手紙を差し上げなさいといわれております。」と申し上げた。こうして、今宵の女楽が興ざめとなってしまう、その歌を亀山院も御覧になって、「本当に優雅な振る舞いですな。今宵の女楽はこれではおもしろくありませんまい。今回はこの歌をいただいて帰りましょう。」といわれ、この歌を持ってお帰りになった。こうなつたうちは、隆親の最愛の孫娘も琴を弾くわけにはいかず、人々は、「隆親のやり方は非常識だ。老いのひがみか。それに対し二条の振る舞いは優雅なことだ。」と話して、その場は終わることになった。

今回、二条が詠んだ和歌には「物の数ではな

い情けない我が身の程を知りましたので、このとおり、琵琶の絃を切つて、琵琶も今世のことも、今生では断念いたしました。」という意味が込められている。

この出来事で、『とはずがたり』には二条は自らの言い分を、強く主張するとともに、隆親とその孫娘がとつた行為に対し批判されるよう描かれている。ここまで至つた過程には、二条と隆親との関係が孫と祖父であることから始まり、その後両者に愛情が途絶えたところに原因があつたと思われる。

この厳しい環境をもとに自分自身が選んだ行動や考えについて正当なものとして訴えたかつたのだろう。そこには、隆親のやり方に対し非難が起つたというように描かれており、また、両院も二条のやり方に理解を示し、彼女の行いは優雅なものであつたと言われている。しかし、本当に周囲の考えが二条が思つていたものであつたかどうかはわからない。勝ち気な性格の二条が、隆親の一方的なやり方に、怒りを覚えその場を去つた行動は、二条の自己愛の強さを伺わせるものであり、また二人の間柄即ち、これまた祖父と孫の関係であることを知る人はこのような事が起こることを最初から予期している者もいたかもしれない。このような中でも二条は御所を出て静かな暮らしを思い描いていた。二条がとつたこの行動は彼女のその後の人生を左右する大きなものでもあつた。

■主な参考文献、そして、今回おすすめする本。

- 『とはずがたり』[後深草院二条著]；三角洋一校注  
『たまきはる』[建春門院中納言著]；三角洋一校注  
岩波書店 新日本古典文学大系；50 1994年。

おかざき よしひこ (司書・情報サービス課)